

斯様にして遠征隊は誕生し、本部は杉原教授の研究室におき、派遣事務は学生課の大津健造氏がお世話下さり、報道は大阪読売新聞社に御協力いただいた。

遠征において最も苦勞なことは資金調達であるが、これは隊員の自己負担を基盤として、当初の計画になかった、氷河への飛行機チャーター料その他を、本誌『アラスカへの道』の購読料として予想額を越える御支援を得て充当することができた。

他にも登山装備、食料、医薬品を寄贈していただき万全の準備のもとに遠征できたことは幸いであった。

登山中のことは隊員の報告に譲るが、6月9日多数の御見送りの中を、大阪空港を飛び立ち、8月10日には全員無事帰阪した。

技術研究会として初の海外登山は無事成功裏に終了致しましたが、之は偏りに大学関係者の御協力と御支援によるものであり、厚く御礼申し上げます。

2. アラスカ案の誕生まで

苗 村 元

〇 探検部山岳技術研究会 “私はこの名称の意味も考えずに入部した。このとき探検的登山というのが自分の好みにあっているように思えたが、北アルプスに登ることがそれに入るかどうかは考えもしなかった。しかしこの単純な疑問は次第に変容しつつ私を取り巻くようになっていく。本当のところ特別な意味はないようであるが、やはり山行におけるパイオニアスピリットとその実践、これだけは切り離せないものであるらしい。このことから必然的に海外の山が目標となってきていた。事実アンデス遠征をやり、次期遠征が待たれていた。私の入部時から何回か計画を聞くことがあった。また現役も狭い国内での活動でパイオニアワークを云々するには少なからず窮屈さを感じていたから、やはり遠征が一つの突破口であると考え、これに期待していた。しかし具体的行動に移ることもなく、発表すらされないまま時は過ぎた。また現役自身も漠然としてではあったが、それぞれに企画をもっており、各人がその計画の実現を目指していた。国内合宿もその条件に合ったものとして

話し合われるようになり、一時期気運の高まりを感じたこともあった。ただその時の気持として、探検の二文字が妙にひっかかっていた。自分の行こうとする所が探検の名に値するか。また少なくとも、この倶楽部で実行するだけの意義を見い出せるのであろうか。ヒマラヤ行でさえその登山活動に限ってしまえば探検と呼ばれなくなっている今日である。これを解決するには余りに時間がかかり過ぎた。個人山行のようなものとしてどうしても行こうというものや、なんとかそれらしい形になるまで時期を待つというのが大半であった。あきらめて去っていったものもあったし、探検を頭から否定したものもあった。今まで固く結ばれていたものが壊れ、陰悪なムードもただよいはじめた。またこれと前後して起こった学内問題から端を発し、クラブ全体に、そしてOB会との間にも問題が波及した。探検論が入り乱れ、組織改革さらには、技研の解散まで説かれるようになった。ここにいたって山岳探検の存在というものが明確に最終的な形で問われたのである。残念ながら私達はそれへの解答を即座に出すことはできなかった。ただ探検という概念をつらぬき通すにしても捨て去るにしても、パイオニアワークだけは絶対に忘れないということにははっきりしていた。以上このような経過の中で、私達が感じた危機感と自己に加えた批判とが今回の遠征の原動力となったのである。私達の反省とは次のようなものであった。自らの企画をもちながら積極的な行動に出ず、結局他人に依存していたのではないか。海外の研究活動を有効に行うためのリーダーシップに欠けていたのではないか。自己の力を過大あるいは過小評価したため、現在の目標を誤ってはいなかったか、等々。とにかくパイオニアワークを見失なわないためには、海外の山をもっと自分に引きつけ、遠征を身近に感じるための行動力を養うべきである。研究の場を常に持っていて、いつでもそれが遠征母体となれるような組織と、長期に亘って計画を進められる体質とが必要であった。いずれにせよ我々自身が直様行動に移ることが一番大切であると結論したのである。今、私達が考え得るのは、ちっぽけなものかもしれない。仮りに探検というものに照らし合わせるとすれば、ぼんやり遊び事にすぎないであろう。しかし自己の本能に従って進

める計画ならば、それは少なくとも私達のパイオニアワークに通じるはずである。今や技研の行動が地理的探検に限られることはない、私達は考えたのである。探検というものから脱皮して、次なる概念のもとに発展するか、または新たに探検を見い出して追求するか、それは個々人の本能に聞く他はないだろう。そこで私達は正直な気持となってこの思いを最も満足してくれる所を探したのである。計画を一つにまとめ上げ、これを進める上で種々の問題を解決しようと考えた。そして遠征といえないまでも、学生三名の海外合宿として適当と思われるアラスカの地を選んだのである。もともと各人が企画をもっており、その素地が出来上がっていたのだろうか。話は急速に進転した。アラスカという土地はアメリカ最大の面積をもつ州でありながら、人口25万人程度でまだまだ未開発であり、自然はそのまま残されている。私達の信条をもってしても、充分満足しえる所であった。また北極圏に近いという魅力があり、入国入山も比較的簡単である。山岳地帯は高度こそ低いが、気象条件は厳しく雪線も低い。なによりも豊富な氷河とアルペンの山容を持ち、スケールの点からいっても相手に不足はなかった。主なる峰はアメリカ隊等によって登られているが、日本隊の入っていない、またアメリカ隊もほとんど入ることがなかったヘイズ山群を見い出した。次に私達の理想とするなにかを、アプローチから下山までの行動の中に表現しようと、その検討に移った。また三名の空回りでなく、いかに多くの人々の理解を得るかがこの遠征の鍵であった。技研自体の実行力をどこまで発揮し得るかを確認すれば、おのずと次の大遠征を計画できるのではないか。それはきっと新しい次元のものであると私達は信じた。私達の唯一のねらいはこれであったと言えるだろう。ここにもう一言つけ加えたい。それは我々現役と時を同じくして、いやもっと早くからOB諸兄の間に他の計画が進行中であって、我々が創り上げたいと念じていた研究活動の場が、すでにもうけられていたことである。このとき今までのことが思ひすこしというよりは、私達の思い上がりであることに気がついた。しかし我々はアラスカ案を引っ込めることなく、これにぶつかっていくことにした。それは強い情熱さえあれば、共だおれ

Mt センリ 概念図

I (12360 ft)

II (12261 ft)

E4 +

III

Trident Gl.

AC